

近世浄土宗本堂の研究(そのI)

岡野清

STUDY OF THE MAIN HALL IN JYODO SECT IN EDO PERIOD (PART I)

随念寺本堂

序言

近世に入って建造された仏堂の残存数は普遍的に広く分布し、その数も急増している。然し、これ等に関する調査研究は、従来近世寺社建築に対する芸術的評価が極端に低かったためあって、殆んど未開拓のまま放置されて来た。しかし最近になって開発の進行と近世建築も漸く、大改修を必要とする時期に到達して来ていることなどに促されて、移築改築を受ける機会も多く、かてゝ加えて大大都市が第2次世界大戦の空襲によって多量に焼失し、絶対量も著しく減じていることもあって、今やその研究も焦眉の急となり初めて来ている。更に研究を怠っている場合には、次第に煙滅し、遂には近世に至って建築史のブランクを生ずる恐れすら感じ初められてきたのである。

次に近世仏教建築の特殊な傾向として、中世以来発展して来た新仏教の隆盛がある。即ち禅宗、浄土宗、浄土真宗、日蓮宗などの建築が多数を占め、特にこれらの宗派は庶民とかゝわりを深くしていた関係上、到る所に数多く建設されていることが注目される。

この時代の初頭には中世来の戦乱で焼失した大伽藍の再建されたものも多く、建築史をにぎわしているが、これとは別に上掲の新興宗派の本山を初め、各地に散在する大小の末寺が泰平が長く続いたこの時代全体を通じて、新築或は改築拡張を続けて来たのは真に壯観とも言えるのである。斯様な経緯を背景にした中において伝統的な大寺院はさておき、建築的に殆んど無名に近い地方の数少ないこれらの建築についても検討を進める必要が生じて来ている。本学に於ても数年前から、地理的に利便な三河地方から手掛けて、建築学科学学生の卒論論文の指導を兼ねて当地に於けるそれらの寺院の調査を進めて来た

のであるが、漸くその系統的把握の緒を見出したので、宗派毎にまとめて発表することゝした次第である。

創立と沿革

この寺の創立創建については

寛保元辛酉年(1741) 勝誉的翁

「仏現山善徳院随念寺御草創代々記録」

七月上旬成就 写之者也

と表記された文書に、次のようにある。

永禄五壬戌春東照大権現様廿一歳御年当寺御草創也

其節從御城以_ニ久姫君之御殿向(古蔵庫裡)并_レ廊門等迄_ヲ本堂始惣テ御造立!

一、本堂爾後再建立元和己未年大工当町弥右衛門

一、本堂(当山六世)上葺建立寛永元庚丑年

一、本堂建立延宝七己未年十月十五以入仏御主太田氏道専金五十両子息彦十郎同甚十郎同彦右衛門合五拾両都合金百両其外自他旦那奉_ニ而成就太田氏願主、因縁故_ニ月次、説法道専之忌日毎月十五日_ニ勤ム

一、元禄十四辛巳七月内陣廻り障子其外越障子唐紙等成就

一、元禄十四辛巳九月廿一日天蓋小幡共為請

以上の中で、永禄5年(1662年)は御寺草創としてあるが、伽藍の建立には至っていないようで、永禄5年以来庵のようなものがあつたのが、大工弥右衛門によって元和5年に本堂が建立されたと見られる。

その後は、寛文元年(1661)瓦葺、延宝7年(1679)百両をもって建立(金額からいって修理改造であつたであろう)、元禄十四年(1701)には内陣廻

りの障子の手入れをした。須弥壇裏には同年の墨書が見られる。結局様式上から見ても元和に再建されたのが現堂と認めてよいであろう。現堂は桁行7間（実長9間半）梁間8間半（実長9間）屋根入母屋造本瓦葺で、前面に向拝、背面に後補の下屋がつき、南面する。敷地は岡崎城を南に望む小高い丘で、南から真直ぐな登り石段を辿り、鐘楼門を潜って入り、本堂と東側にある庫裡を結ぶ廊下に設けた唐破風屋根の玄関に突き当たる（写真1）。玄関奥はそのまゝ大書院となっているが、庫裡も書院も後補の建



写真1 南面からのアプローチ



写真2 本堂東南面



写真3 本堂西南面

物である。本堂の西及び背の丘にかけて墓地となる。本堂は正側三面には落縁をまわし、高欄をめぐる。軒は正側二軒半繁垂木、屋根両妻飾は虹梁大瓶束で、東の両脇には笈形をつける。

前面に1間半巾、側面に1間巾の広縁をとるが、その外側を戸口や窓で囲って堂内に取り込む。

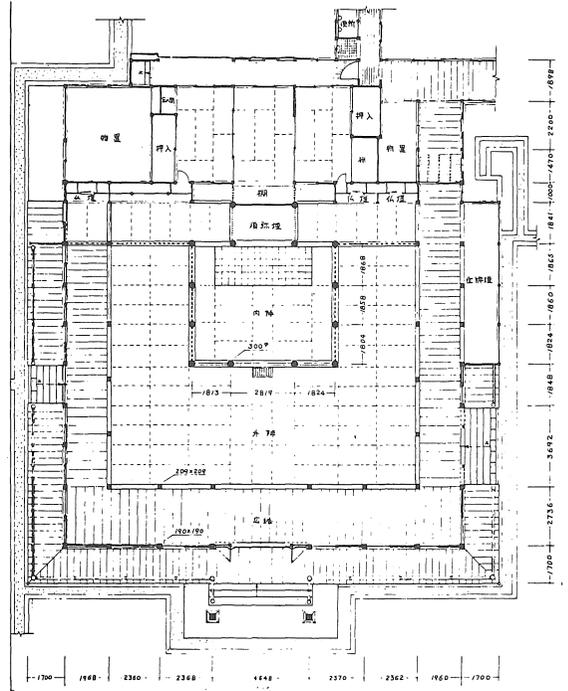


図1 随念寺現状平面図

入側から内前方奥行実長3間と内陣の両側の巾2間を外陣とし、これに囲まれた桁行3間（実長3間半）梁間3間を内陣として、円柱でとりまき、その後方中央1間分を外に張り出して円柱で囲い、中に禅宗様須弥壇を置き、更に後方に浅い棚を設けて仏像を安置する。次に両脇、外陣の奥と西広縁の奥には奥行半間の仏壇を設け、内陣須弥壇裏両脇の各一間は背面の下屋に通じる戸口とする（図1）。

以上のうち仏殿風に取り扱われているのは円柱で囲まれた内陣とその奥の須弥壇まわり及び脇外陣奥の仏壇前方1間の柱間で、円柱上には粽をつけ、飛貫、頭貫、台輪をまわし、頭貫木鼻を出し、飛貫頭貫間を小壁とし、外陣奥では飛貫、頭貫間に束を入れ束上に粽をつける（写真4）。

柱上斗拱は出組、中備には外陣側では板墓股上に出三斗々枿をおき、内陣側では墓

股を大きくして斗一つをのせて桁を受け(写真5),又内陣側面には結界框を入れ,その上に棚をおき,框下を羽目板でふさぐ。内陣天井は折上格天井,須弥壇上の張り出し部分も折上格天井で,支輪のみ小組が入る。また正面外陣境の中央間では飛貫を唐破風式に曲げて頭貫下に接し(写真4),須弥壇前の柱間では頭貫と台輪を唐破風状に曲げて内法を高くし,天井桁に届かせている(写真6)。以上の部分では円柱下半を朱塗りとし,柱の上部から長押斗拱にわたり極彩色を施し壁面には金箔を押し,結界框,須弥壇,外陣仏壇まわりは黒漆塗りを主調とし,外陣

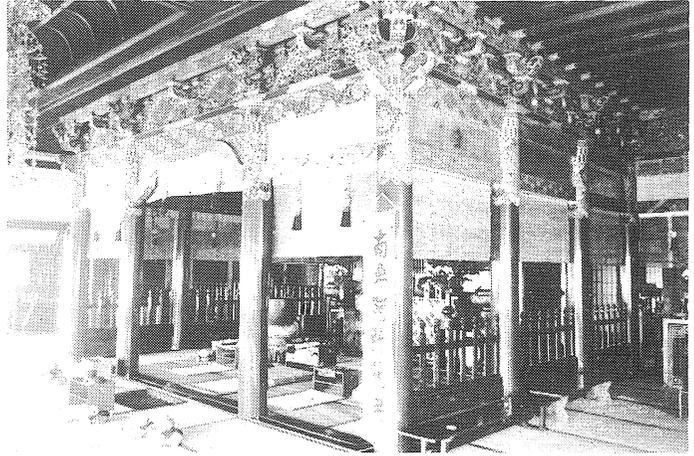


写真4 内陣

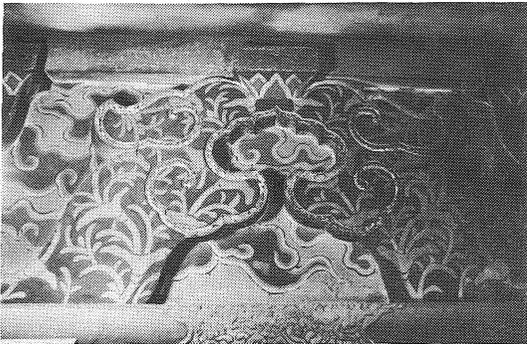


写真5 内陣内側墓股



内陣外側墓股

仏壇羽目板は極彩色,天井は格縁は黒漆塗りとして面に朱を入れ,金鍍した辻金具を打ち,天井板は黒青色に塗る(写真6)。

東脇の間奥の仏壇上は左右に2分し前壁に円窓を抜いて,その奥に像をまつり,西脇の間奥の仏壇では円柱,頭貫,台輪,斗拱を組んだ中に厨子の前面を嵌め込んでいるが,これは一向一揆の時の戦利品であるという(写真7,8)。

以上の他の部分では総て面取角柱を用い簡素で邸宅風に敷鴨居(または無目),内法長押,天井長押をめぐらして棹縁天井をあげ,内法長押上を小壁とし,入側内側では蟻壁をつける。やゝアクセントをつけて飾られるのは向拝まわりと正面の戸口である。向拝では線型を造り出した方形礎石の上に几帳面取り角柱を立て,柱下に沓巻の板を打ち柱上に粽をつけ,柱間に虹梁を渡して木鼻を出し,柱上連三斗,中備は板墓股(両者の中間に葵紋を新しく追加)手挟付きと型の如くである(写真9)。



写真6 須弥壇前唐破風と格天井

広縁外正面中央間では内法を高め,楣,方立,蹴放,小脇羽目を構え,楣上に虹梁形をはり,その上の桁との間の中央に大板墓股を置き,両端にはそれを折半したものを各々入れ,楣と縁長押に蒿座を打って双折棧唐戸をつり,内法に引違障子を入れる(写真10)。

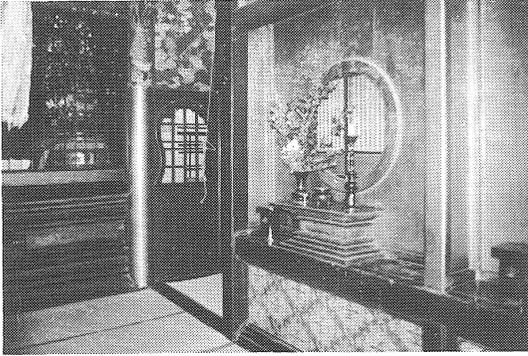


写真7 東脇の間の仏壇

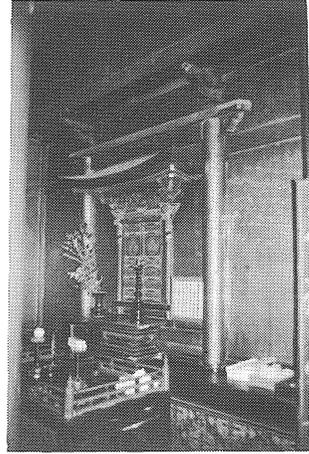


写真8 西脇の間の仏壇

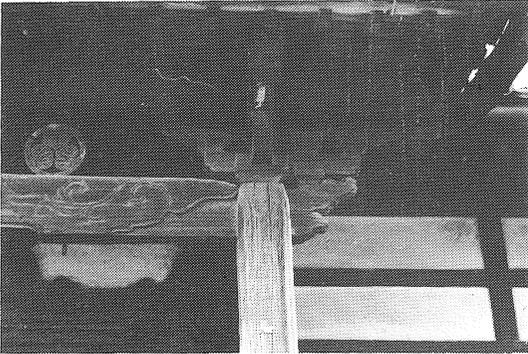


写真9 向 拜



写真10 広縁外の正面中央間

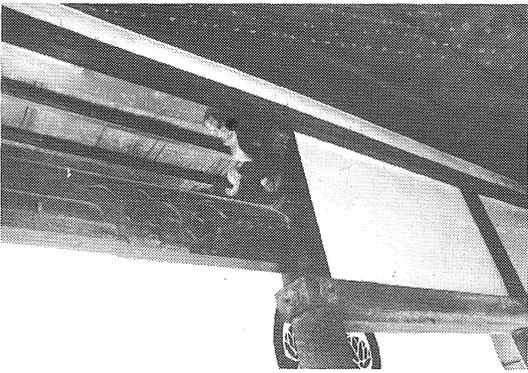


写真11 入側通り正面中央間

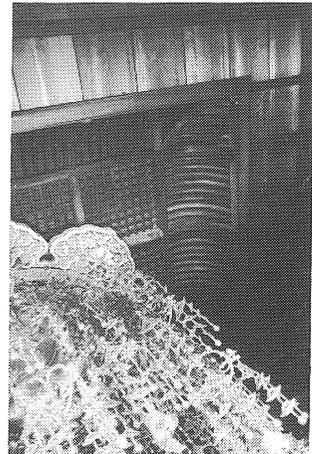


写真12 外陣中央の折上小組格天井

他各部では中敷居上に戸2枚、障子1枚を入れ、西側面前から4間目と東側面前から2間目（柱間が広く2間分をとる）に戸口を構えて、落縁内に木階を設ける。又入側通りの正面中央でも実長2間半分の柱間に虹梁を渡し、虹梁と桁間に大板臺股を入れ、両端にはそれを折半したものをとりつけ、臺股間を開放している。しかし虹梁は後入れで様式も新しく元は内法長押が通って小壁ができ、中央に吊束を入れていたことが知られる(写真11)。外陣の正面中央の棹縁天井の中には後補である折上格天井を嵌め込んで、人天蓋を吊している(写真12)。

復元的考察

この堂では後世の改造は比較的少ないが、重要な変更は両脇外陣の内陣前列から1間奥に間仕切があって、その上に現在その奥の仏壇から1間前に配置されている小

壁や斗栱がそのまま移って、外陣がそこで終わっていたことで、その後方は脇の間、更に仏壇前の間と区切られていた。そのことは内陣前列から1間奥の円柱とそれに対する入側通りの角柱の内側にそれらの取付き痕跡があり、更に間仕切外側長押が取付いた証拠に入隅留が残っており、敷鴨居の取付痕跡もある。また脇仏壇前1間の柱間にも内法長押のとりついた入隅留が残り、中央の吊束が残っているのここには入側通り同様長押上に小壁が通っていたことがわかる。これらのことはこの部分天井板が切れている点や、又天井棹縁の配置がこれに応じて納まりよく付されていることから立証出来る。

さらに仏壇前の柱間には結界框が取付いた仕口の埋木があって、内陣回り同様結界が廻らしてあったことがわかる。なお同じ結界は内陣正面両脇間にも及んだ痕跡があり、また現内陣側面の結界框上に立つ柵を除くと敷居溝があり、上方無目鴨居でも溝を埋めていて元ここに建具があったことが分る(写真13)。

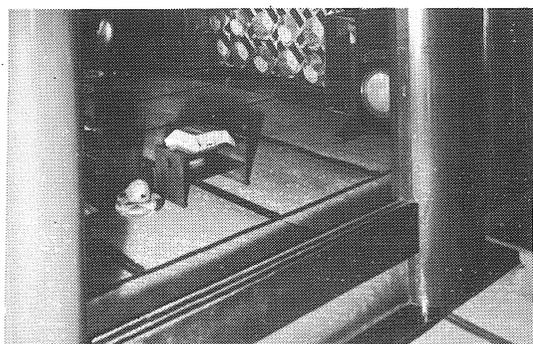


写真13 結界上柵を外すと元は建具であった

この建具は当然内陣正面両脇間に及んだと見られるが、脇の間と脇仏壇前の間の境の敷鴨居にあったか否かの証拠は発見出来ない。

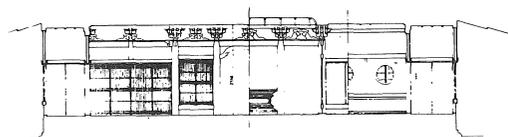


図2 随念寺復原桁行断面図

内陣正面中央間には結界框の取付いた痕跡もなく、上方框が唐破風状に曲っているので、初めから開放であったとする他はない(写真4参照)。

なお脇の間や仏壇前の間と広縁の間にも間仕切があり(敷鴨居残る)、広縁にも上記二列に並んで室が設けられたことが内法長押のめぐっていた痕跡から知られる。

かくして結界は脇の間奥の仏壇前の間の前面から内陣

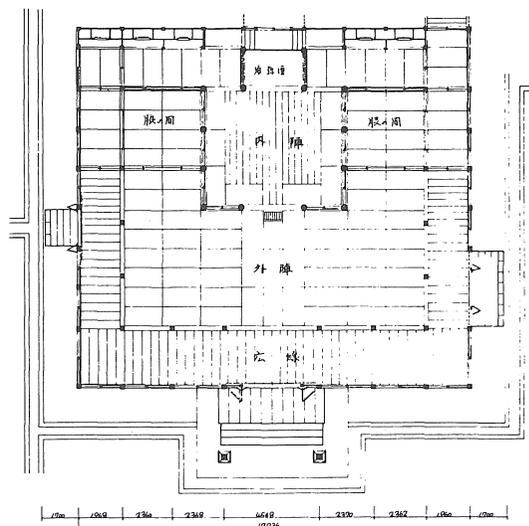


図3 随念寺復原平面図

の外をめぐって凸字状に連なり、柱上斗栱も正面から見ると脇の間前から内陣前列にかけて凸字状に続いて、外観を引き立てていたことが知られる。なお現状東の広縁部分から外の落縁部分に張り出して位牌壇を設けているが、勿論新しく、後補のもので、元は中敷居が入って窓となっていた。

次に内陣須弥壇後部では後壁の両脇円柱に対する外側の角柱との現内法より約70cm下に元の内法貫や内法長押の取付き痕跡があるので、元戸口がずっと下っており、従って床も下方にあったことがわかる。

この寸尺からすると、柱間に地上の地覆石にのった地覆か敷居をおいて、その高さに床を設けたと推定される。従ってその戸口を入った左右に木階があって、須弥壇の横に出られたであろう。

そして現在戸口になって後方の下屋に通じている柱間は壁となるであろう(柱に板を張って仕口が隠されているので明示は出来ない。)

以上の如くであれば少なくとも背面には下屋も縁もなかったこととなるが、現在正側3面の縁下になっている側柱の下部を見ると、風蝕が極めて強く、且つ腰羽目が残されており、これらの材も古いので、元は落縁は存在しなかったと考えられる。縁の材料は西側面の戸口から後方部分を除いて新しいが、現在取付くものに経年の長い材が残された部分もあることからすると、かなり早くから取付けられていたものとはしてはならないだろう。

結語

随念寺は徳川政権との関係も深く、地方の浄土宗寺院

としては格式も高く、かつ古式がかなりよく保たれている例として注目すべきものであるが、本堂については、今回かなり徹底的に原形を復原することが出来、江戸時代初期の浄土宗本堂の好例を提示することが出来たのは幸である。なお本堂の歴史的な位置づけについては次稿の隣松寺本堂と合せて、その結論の中で論ずることとした。

なお浄土真宗本堂を加えて、この一連の研究については浅野清教授の指導と卒研諸君の助力に負うところが多い。合わせて感謝の意を表したい。